妊娠期から子育て期にわたる切れ目のない支援～伊達市の取組～伊達市版ネウボラ事業

福島県伊達市こども部ネウボラ推進課
副主幹兼ネウボラ推進係長兼統括支援員
村田 桂

1　はじめに

伊達市は東に阿武隈山系の霊山（りょうぜん）、西には吾妻連峰、北方には宮城県境の山々が遠望できる福島盆地の北部に位置し、県都福島市の北東に隣接しています。

平成18年１月１日に伊達町、梁川町、保原町、霊山町、月舘町の５町が新設合併して発足しました。現在の人口は約56,000人、年間出生数は約210人です。少子高齢化による人口減少が進む中、すべてのこどもたちが生涯にわたって幸福な生活が送れるようこどもの健やかな育ちを促すこと、そして保護者が安心して子育てができ、子育ての喜びを感じられるような支援に取り組んでいます。

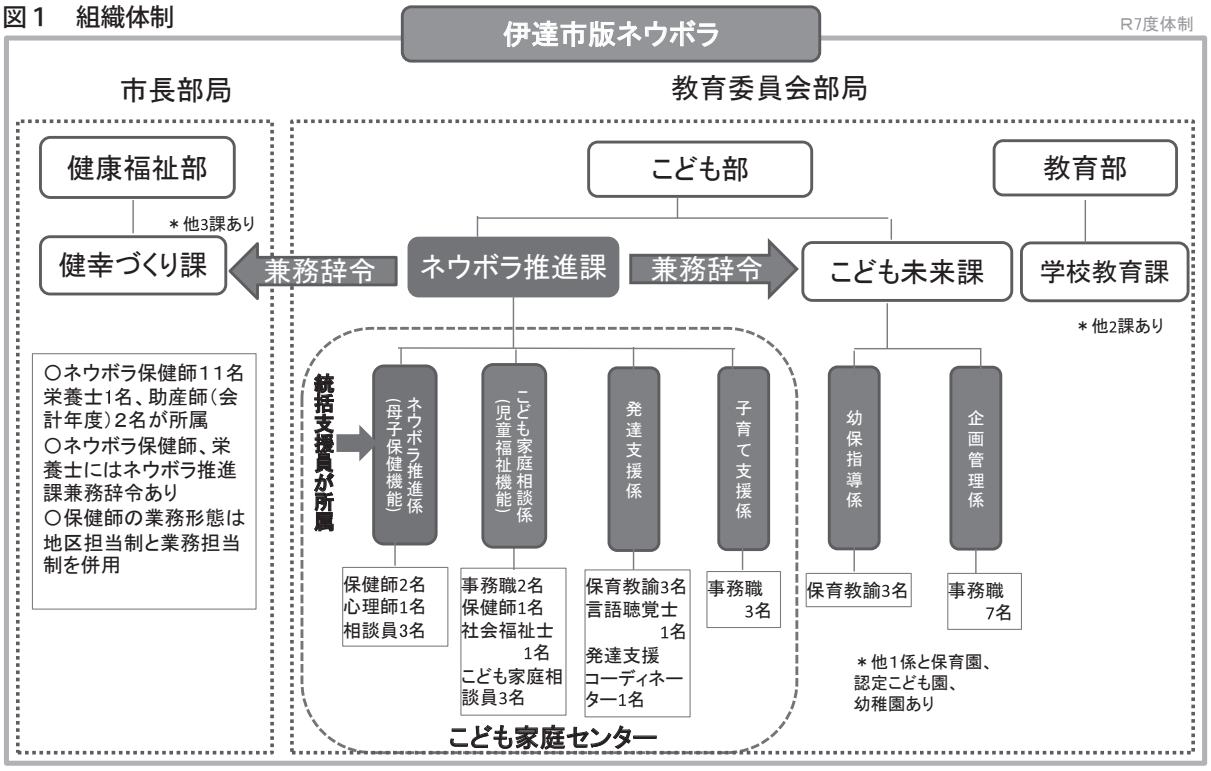
2　「伊達市版ネウボラ事業」の経過

「ネウボラ」とはフィンランド語で「相談の場」という意味です。フィンランドでは、妊娠が分かった段階から子育てまでの支援を、自治体の設置した施設であるネウボラが行っています。このフィンランドのネウボラの仕組みや体制に共感し、平成29年４月「伊達市版ネウボラ事業」が開始となりました。

現在の組織体制が図１です。平成29年度開始時、主管課を保健部門の健康推進課（現在健幸づくり課）とし、全庁体制とするため児童福祉部門にも兼務辞令を発令、令和２年度まで健康推進課内のネウボラ推進室で事業を行っていました。この時期からすでに今のこども家庭センター機能の体制になっていました。

令和３年４月、こどもの育ちを考えた時、保健・福祉・教育の連携強化が必要であることから教育委員会こども部にネウボラ推進課（ネウボラ推進係）を新設、事業全体のマネジ

図１　組織体制



メントを行う保健師をネウボラ推進係へ、実際に子育て支援を行う保健師を健康推進課に配置しました。令和６年４月には伊達市こども家庭センターを開設、保健・福祉の連携を更に強化し、より相談しやすい体制を整えています。

３　伊達市版ネウボラ事業の取り組み

コンセプトは、妊娠期からの切れ目ない支援そして親子が笑顔になる架け橋とし、「寄り添う支援」と「保健･福祉･教育の一体的支援」を２本の柱とし推進しています。対象は、すべての妊婦と18歳までのこどもとその家庭としています。リスクは「芽のうちにつむ」。困る前につながれるような関係づくりを大切に予防活動をしています。

(1) 切れ目のない支援を行うための職員の配置

健幸づくり課所属の保健師は、妊娠届出時に妊婦さんと面談し、原則子育て期まで同じ保健師が担当します。「私が、○○さん担当の保健師です。」が初めのあいさつになります。保健師は各々に携帯電話をもち、妊娠届出時に図３にある顔写真、名前、携帯番号を記載した名刺を渡し、携帯番号も登録してもらいます。携帯電話は平日の就業時間のみの利用です。お母さんたちからは、相談先が明確になった、取次がなくダイレクトに話せると好評です。保健師も、継続してかかわることにより信頼関係を築くことができ、支援もしやすくなっています。

図３　ネウボラ名刺

保健師がかかわるので「健康増進計画健康だて21」に掲げる「次世代の健康を守る」生涯を通じた健康づくりの強化」にもつなげています。生活リズムやかかわりの大切さを伝え、よりよく子育てができることを目指す事業の組み立てとなっています。

(2) 子育てを社会で受け入れる取り組み

妊娠32週以降に、全妊婦さんを訪問して育児パッケージを贈呈しています。市長のメッセージとともに、伊達市みんなでお子さんの誕生と成長を祈っていることを伝えています。妊娠後期に自宅を訪問し、一緒に赤ちゃんの誕生を待つことでより顔の見える関係性が築け、産

図２　伊達市版ネウボラの事業概要

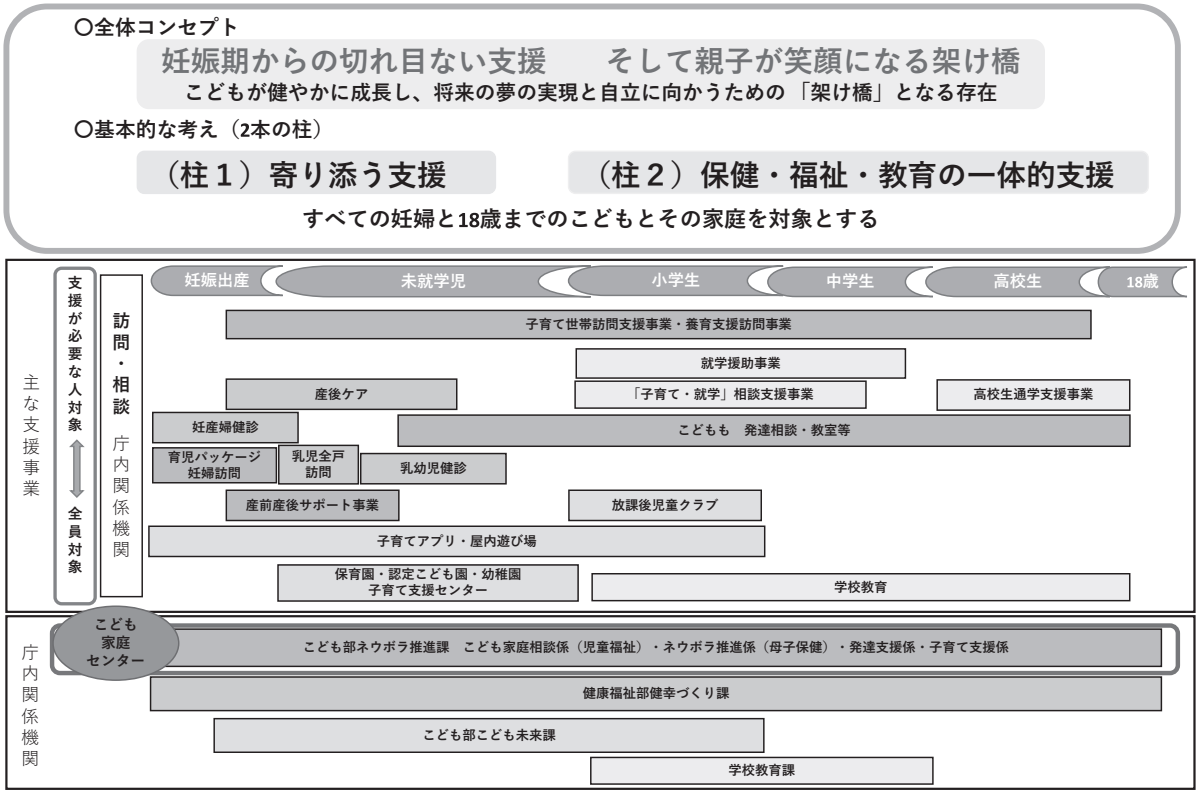


図４　子育てを社会で受け入れる取り組み

【育児パッケージ】

後早くから支援ができるようになっています。

(3) 産前産後の支援の強化

産後ケアには、訪問型、デイ型、宿泊型があります。それぞれの家庭に応じた支援をし、母親のセルフケア能力を育むことに力を入れているため、助産師による訪問型支援を強化しています。母親が「もう大丈夫、できる」というまで支援するので回数は制限していません。その他、サロン等さまざまな事業を取り入れ、子育て家庭と継続的に会える仕組みを構築しています。

(4) きめ細やかな相談機会の充実

ちょっとした悩みなら会話の中から自然に解決でき、また次の支援につながるような事業の組み立てと、気軽に相談できる相談員を配置しています。産前産後サポート事業を担当し、乳幼児健診等の待ち時間には母親等に声掛けをするなど「近所のおばちゃん」のような存在となっています。相談員は、保育士、幼稚園教諭、教員免許等を所持しており、状況を整理して判断することや他職種との連携も行っています。母親からの信頼はとても厚く、居心地の良い居場所を作っています。

また、公認心理師も配置しています。個別支援や乳幼児健診、相談会、出前講座等では「愛着形成、かかわりの大切さ」を伝えています。見えにくい心のニーズに気づく力は、育児への孤立を防ぐことからも重要です。このように、顔が見える関係性の中で、母親が安心して話したり相談したりすることができ、より良い関係づくりにつながるとともに、きめ細やかな相談機会の充実が図られます。

(5) こどもの育ちを促す取り組み

親子が楽しみながらこどもの育ち、親育ちを伸ばせる環境を整えています。遊びの教室や遊び方のヒントを載せた小冊子、YouTube配信等でおとなの良いかかわりの推進をしています。

(6) 子育てを楽しむ仕組みの構築

親子が子育てに関する情報を知るための情報発信や、交流できる仕組みを作っています。子育てアプリや子育て支援センター（６か所）、室内遊び場（４か所）があり充実しています。

(7) 保健・福祉・教育の連携の強化

「伊達市総合計画」や「伊達市教育大綱」には伊達市版ネウボラ事業を明記しています。令和６年度は「伊達市元気な子ども・みんなの子育て条例」、令和７年度は「伊達市こども計画」を策定し、庁内横断的な事業を検討しています。

この横断的な連携によりこどもの育ちを連続してみることが可能になり、子育て支援スタッフも、こどもたちの将来の自立を目指した施策を意識するようになってきました。

４　伊達市における連携のポイント

図５のようにポイントは７つありますが、やはり連携にはコンセプト（支援の考え方、目指す姿）を共有していることが最も重要です。現在、統括支援員として私が連携の大切さを感じているのは、支援について悩んだらすぐにスタッフが集まって話し合えることです。これは、平成29年度から取り組んでいるネウボラ体制での顔の見える関係性、信頼性からくるフットワークだと感じています。

そして、連携を通して再認識したことは、支援者同士の安心感です。職種によって考えや見立ては違います。そこを役割の明確化に変えること、誰が今の状況でケースにかかわることがベストかなどを共有し合えることは、支援者同士の安心感につながります。意見を言い合える、話し合える環境を大切にしています。伊達市版ネウボラのリスクなし層を増やす、リスクを芽のうちにつむなどの予防的支援には、連携は重要です。

図５　伊達市における連携のポイント

○管理職を巻き込む

○それぞれの職種の専門性、役割をそれぞれが理解している

職種によって見立ても違う。そこを理解していないと「どうしてわかってくれないの？」という思いが出てしまいがち。

○連携の考え方を共有している

「私が連携しなくてはならない」と考えると負担。それぞれの持ち場でやることやって持ち寄る、または、つなぎやすい、つながりやすいところが中心となって動くと連携の負担感が減る。

○情報の共有は早めに行う

必要とする情報のレベル（リスクの度合い等）は部署により様々。気軽にタイムリーにできる仕組みがあるとやりやすい。

○顔の見える関係が築ける体制である

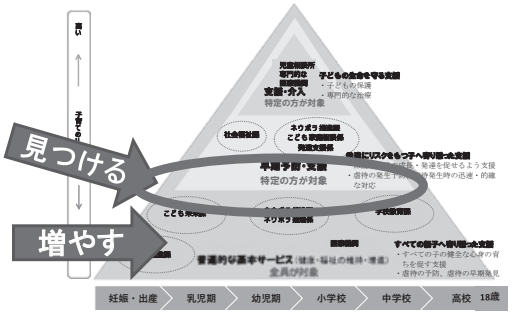
顔が見える関係を築けば気軽に相談等ができる。でも皆が気軽に声をかけられるわけではない。それならば定例会等の開催により顔見知りになれる機会をつくる。

○職員が安心して支援できる体制づくり（支援者に負担感を与えない）

職員が支援を相談できる、一緒に考えることができる体制の構築と人員配置は大切。

○コンセプト（支援の考え方、目指す姿）を共有している

伊達市版ネウボラは**リスクなし層を増やす**（普遍的な基本サービス）、**リスクを芽のうちにつむ**（母子保健機能、児童福祉機能）の2つの考えのもと推進している



また、「幼児期までのこどもの育ちにかかる基本的なビジョン」をもとに「めざす伊達っ子の姿」を作成。保健部門と幼児教育部門が共通の言葉で目指す姿を理解できることを目指す。
そして、考え方等は自由に語り合える場や雰囲気があると顔の見える関係性が築けて様々なことが共有しやすい。

5　事業の評価

伊達市版ネウボラ事業では、今後もこの地域で子育てをしていきたい人の割合（すこやか親子21アンケート）を指標としています。令和５年度は77％（全国平均64.7％）、令和６年度も７割を超えています。また、ネウボラでかかわった市民の声として「夫の仕事で異動があるが、伊達市で第２子も育てていきたいと考え家を建てることにした」「初めての赤ちゃんで不安が大きかったが、いろんな職種（保健師・助産師・相談員・公認心理師等）の方に話を聞いてもらえてすごく楽になった」などの声をいただきました。

困った時だけでなく、何もない時にも人と人がつながり、支え合うことが信頼性につながります。保健師の担当制、そこからつながるネウボラスタッフのチームワーク支援で継続したかかわりの積み重ねが評価につながっていると感じています。

6　おわりに

伊達市版ネウボラは、すべての妊婦、こどもとその家族を対象としています。こどもが心身ともに健やかに育つよう、愛着形成と望ましい生活習慣を整えること、そして、家族が子育てによりよく向き合うことができるよう寄り添う支援、切れ目のない支援により、保護者が過度な負担を感じることなく、子育ての喜びや楽しさを感じられるような支援をしていきます。

傾聴・共感・承認の丁寧なかかわりで、子育てをひとりぼっちにさせない、予防的支援でちょうどいい距離感、信頼関係を大切に、今後も支援していきたいと思っています。

「子育てこそ伊達」、地域の実家になれるよう取り組んでいきます。

著者略歴

村田 桂（むらた・かつら）

平成８年４月伊達町役場に保健師として入庁。伊達市役所健康福祉部健康推進課で母子保健や成人保健の予防活動に従事。令和３年４月健康福祉部健康推進課地域母子係長、令和５年４月教育委員会こども部ネウボラ推進課ネウボラ推進係長、令和６年４月伊達市こども家庭センター開設に伴い統括支援員兼務。現在、伊達市版ネウボラ事業を主務に子育て支援に取り組んでいる。